
scwarz/GATE

scwarz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

s c b w a r z / G A T E

【Nコード】

N 4 6 9 3 Y

【作者名】

s c b w a r z

【あらすじ】

地元がど田舎過ぎて娯楽なんてほとんど無いに等しい俺は、特にやることも無く、バイト漬けの毎日。そんなごくありふれた学生生活を送っていたある日。目の前に真っ黒な扉が現れた。

興味本位で扉を開くと……

「いらつしゃいませ、ご主人様？」

そんな言葉と共に狐耳の少女が丁寧に三つ指ついてお辞儀をしていた。

内容は異世界ファンタジーものです。

主人公がチートとかそういうのはあまり使わないように努力しながらの、練習作品です。

どうぞ、興味がありましたら是非読んでいって下さい。

11:11/18

拙い作品ですが、日に日に読者様が、増えていることにビックリしている作者です。

皆様、ありがとうございますm()m

お気に入り登録されている方も増えて来ており、ありがたく思っております。

できるだけ毎日更新していこうと思っっているので、宜しければまたお付き合いお願いしますm()m

扉の先は

彼こと、冴木謙吾の実家は剣道の道場をやっている。謙吾も当然ながら道場で稽古をしている。

謙吾は幼い頃から剣に触れ、欠かさず毎日剣を振り続けていた。いつしか謙吾が大きくなり、必然と剣の腕も上達していった。

その頃には神童と呼ばれるくらいに腕を上げ、周囲の名声を欲しいままにしていた彼だったが、高校に上がると同時に剣を捨てた。

そんな彼が今何をやっているのかというと、

「ありがとうございます。」

私服にエプロンと紙製の帽子。コンビニでレジ打ちのバイトをしているのだった。

「ふう、じゃ先輩。そろそろ上がりますんで」

謙吾は帰り支度をしながらバックヤードにいた先輩に声をかけた。

先輩は、おつかれと、片手をあげて応えた。

裏口から出て帰路につく。

高校に入ってからすぐバイトに入った。

とくにやりたいことは無かったのだが、流石に家に引きこもってるのはどうかと思ったからだ。

それに、家に帰ったところで親がうるさいだけだし、ど田舎なこの地元では周りに時間を潰せるような場所は無い。

「はあー。今日も疲れたなー」

と、1人ぼやく。

時刻は20時を回った頃だ。

最近は法律も厳しくなり、夜中までバイトができないのである。

まあ、野球部の奴らはだいたいこんな感じくらいの時間に帰り支度をしていると思うと、部活やってるよりかは、お金がたまるバイトをやって正解だとは思うかな？

そんな事を考えながら、歩を進めていると、いつの間にか目の前に、真っ黒な大きな扉があった。

大きさは大体3mくらいだろうか。

.....

いきなりファンタジーすぎてついていけない。

いや、マンガじゃあるまいし。と、内心でつつこむ。

試しに裏に回ってみても扉の先はなく、ただのいたずらにしてはちよつと凝り過ぎだと思う。

ただ交通の邪魔にはなっているので、悪戯をしたのなら成功とは言えるだろう。

まあ、ど田舎ですから車なんてほとんど通らないんだけどな。

すっごい気になる。開けても問題無いよな？

内心ドキドキしながら、そつと扉のノブに手をかける。

よし、いくぞー！

ガチャ

ドアノブを回すとそこには……

「いらっしやいませ、ご主人様？」

礼儀正しく三つ指つけてお辞儀をする狐耳（？）の少女がいた。

即刻扉を閉めたい衝動に駆られて、閉めよつとするが

「て、あああ！？ チョット何やってるんですかご主人様！？ ほら早くコツチにきて下さいって！」

と、狐少女に手を掴まれ、そのまま引つ張りこまれる。

扉から向こう側に足がついた瞬間、黒い扉は上の方からスウーッと消えていった。

アレ？

退路がない？

「まったく、あんまり勝手なことしないで下さいね？ ご主人様。」

「なんだか理不尽極まりない事言われつつ、とてもファンタジーな出来事にあつた模様です……」

呼ばれた理由

周りを見渡せば、綺麗に紅葉した木々。

そして、扉のあった背面には小さな湖がある。

目の前の少女に至っては狐耳である。どこをどう間違えたらこうなるのか知らないけど、完全にファンタジーのお話だ。

服装はピンクの色で花柄のミニスカ着物とでもいうようないでたちで、肌の色は陶器のように白い。目鼻顔立ちも精緻な宝石細工の如く綺麗に整っている。金髪の長い髪が、同じく金色の長い尻尾と一緒に風になびく。足元はなぜか黒ニーソに下駄というよく分からない組み合わせ。ファンタジーなのに変なところで現実臭い。

明らかに扉を抜けたここは別世界としか形容できないような場所だった。

はあ……

「どうしたんですか？ ご主人様」

ニコニコしながら、尻尾をフリフリして問ってくる狐少女。

「元の世界に帰りたいんだけど……」

「ムリです。それに、できたとしても私がイヤですから」

イヤって、あのなあ……

「だいたい、なんのために俺をこんなところに連れてきたんだよ」

「それはですね、お話できる人が欲しかったからです」

「いやいや、お前の勝手な事情で俺を巻き込むなよ!？」

そういうと狐少女は急にしゅんとなってしまった。心なしか耳も尻尾を元気が無いように見える。

「ああ、もう。言い過ぎた。悪かった。でも、友達くらい作れるだろ？ 他に誰も居ないのか？」

周りには俺たち以外に人が居なさそうだったのでまさかと思い聞いてみる。

「いえ、他にも沢山の人は居ますよ。それでも私はこんなですから……」

と、少女は自分の耳の先つちよを持って下に下げる。

「耳って、俺はここのことなんか今来たばっかだから全然わかんないけど、他の奴はその……、獣耳じゃないのか？」

「はい。私の住んでいる村はみんなご主人様のような姿です。私は小さい頃から人とは違うと言われ続けられていたんです」

うわ、話が重くなってきた……

聞き出したのは俺なんだからしょうがないんだけど。

「ああ、すまん、嫌なこと思い出させたみたいだな……」

いえ、おきになさらないでくださいと、悲しそうに笑いながら答える少女があまりにも痛々しくて……

はあ、自分の性格が嫌になる。めんどろだと分かってても放っておけない。昔からそうだった。昔はそれなりに力があつたから今よりもそう。

「……。分かった。俺が元の世界に帰る方法を探してる間だけ一緒に居てやる。それでいいだろ？」

え？ と、顔を上げ少女は驚いたようにこちらを向く。

「ほら、泣くなよ。せつかくの可愛い顔が台無しだろ？」

言いながら、恥ずかしく、俺！ とか思い顔が紅くなるのを感じつつてを差し伸べる。

少女は俺の手をしばらく見つめ、ゆつりとてを伸ばす。手が触れ合った瞬間、彼女は関を切ったかのように泣き崩れてしまった。

呼ばれた理由（後書き）

ここまで読んで下さった方々、感謝です！
稚拙な文ながら、ここまでお付き合いしてくださりありがとうございます。
います。

初っ端からへビーな話になりましたが、次回からは明るい話に持つ
てけたらなとか思ってます……

書いてて気づいたらこんな話に……どうしてこうなったorz

次回からようやく内容の方に入って行きますので、よろしければま
たお付き合いして下さいm(´`´)m

以上、あとがきでした！

まずは自己紹介から

少女が落ち着くまでしばらく周りを見ながら考える。

この世界の皆がみんな獣耳という訳では無く、むしろ珍しいと言
うことは、もしかしたらまだ『日本』に居て、少し場所と季節がず
れただけかもしれないという希望的観測ができるかもしれないとい
うことだ。

そんなんだつたらどれだけマシなことかと思いふける。

「あう、ありがとうございます。……もう大丈夫です」

まだ少し涙声だったけど、さっきよりかはだいぶ落ち着いたみたい
だ。

そっか、と応えて少女の頭をぽんぽんと、撫でてやる。彼女の背丈
はそれほど高くなく、見た目で判断するならばぶん中くらい、年
齢でいうと15歳くらいだろうと思う。

自分とはそれほど年も変わらないけど、なんとなくやってみた。

すると、彼女は一瞬戸惑ったかのように身体を強張らせたが、その
うち顔を綻ばせながら身を預けてきた。

「ご主人様の手、暖かくて、大きくて、安心できます」

そんな彼女の言葉が少し照れ臭くて、目を逸らした。

「えと、自己紹介がまだでしたね。私はたまもと申します。そのま

またまもと呼び捨てにして下さい」

「ん、了解。俺は冴木謙吾だ。俺も呼び捨てでいいぞ？ ご主人様はなんだか恥ずかしいし意味分からんし。ていうかなんでご主人様？」

「ちょっと前に、殿方はご主人様と呼ばれるととても喜ぶという話を聞きましたので、それになんとかこの呼び方が気に入ってしまいましたので、このまま『ご主人様？』とお呼びします」

気に入ったって……

俺は呆れ混じりに嘆息する。

ホントはどっちでもいいんだけどさ？

そんな事を考えてるとお腹が空いてきた。

「そろそろご飯にしましょうか？ といっても食材はこれから狩に行かないとありませんので」

狩だと？！

「はい。あれ、わたくし何か変なこと言いました？」

「いや……、大丈夫だ。でも俺何にも持ってないぞ？」

「いえ。ご心配なく。狩くらいならわたくし1人でもどうにかかりますから。あ、でも、ご主人様も一緒に着いて来て下さいね？」

そう潤んだ瞳で上目遣いをするたまもに一瞬ドキツとする。これ天

然でやってる？

「分かったから、大丈夫。心配しなくても着いてくって」

「ありがとうございます ご主人様」

嬉しそうにしてるたまもを見ると、こっちまで嬉しくなってくる。最初は意味不明過ぎて混乱してたけど、別に悪くないかもなど、思い始めてきた。

狩に出発

歩くこと数分。

周りの風景はあまり変わらず紅葉した木々が続く。

獣道が続くことからたぶんここは、町のはずれなのかな？ とか思
いながらたまもの後について行く。

すると、ガサガサつと、茂みから音がして数瞬後に大きな一頭のイ
ノシシが現れた……

と、一言に大きいとは言ったものの、実際にはかなりデカイ。だ
いたい5mくらいの大きさがある。コレ何なんだよ！？ つてくらい
の大きさ。なんつーか、やっぱりファンタジーだなあとかいう感想
と、やっぱり帰る方法探さないとなあー、と思ってしまった瞬間だっ
た。

「ご主人様、少し下がって下さいね？ ちょっとだけ危ないので
！」

そういうと、着物の袖からお札らしき物を取り出して構える。

イノシシ（でかい）が興奮しながら突進してくる。て、かなりヤバ
イんじゃない？ すっげー怖いんだけど！？

そんな風に俺が一瞬身構えると……

「烈火！」

たまもが凜とした声でそう叫びながらお札を投げつける。するとお札は重力に逆らいながら、イノシシに向かって飛んでいく。そして

……

「ぶぎいつ?!」

お札が触れた瞬間、イノシシが炎で包まれて倒れた。その時、イノシシの頭上に緑色のバーがみるみる減っていき、真っ黒になるのを見えた気がする。

「あれはですね、体力値ですよ？ ご主人様は見るの初めてですか？」

服の汚れを払いながら問うてくる。

「初めてってというか、あんなの俺の世界じゃ無かったぞ？ それにどうやって倒したんだよアレ」

と、黒焦げになってぶっ倒れてるイノシシ（特大）を指差す。

ていうかHPバーとかどこのゲームの世界だよ……

「あれはですね、生物の体力を表す物なんですよ。アレが真っ黒になっただけでなくなってしまうと、その生物はあのように死んでしまいます。他にもフードメーターとか、MPバーなんかもありますね」

な、なるほど。RPGのゲームと同じと考えればいいのか。ど田舎出身の俺でもまだなんとかわかる範囲の領域だ。

「それとですね、先ほどわたくしが使いました物は『スキル』とい

うものです」

スキル？

「はい。こうすると確認できますよ？」

と、いうが早く、たまもの頭上にウィンドウが表示される。ファンタジーというよりはホントにゲームの世界にきたような感覚だ。ウィンドウを見ると、

ATK

DEF

AGI

MAT

MDF

LUC

など、ゲームで見たことある値の他、スキルと呼ばれる技とEXTRAスキルと呼ばれる謎な物もあった。

上から、物理攻撃力、物理防御力、素早さと器用さ、魔術攻撃力、魔術防御力、幸運値らしい。そこまでは知らなかった。

「それとですね、スキルは攻撃の他にも補助技能なんかも付けられます。このスキルの事をスロットスキルと言って、6個のスロットに自由に付け替えれるんですよ」

なるほど、じゃ、EXTRAスキルって？

「それはですね、固有スキルというものです。これは生まれ持ったスキルで付け替えることはできないですが、成長とともに増えたりしますね。それにスロットスキルで覚えることのできないものが多

いので、これが沢山ある人は凄いですよ」

らしい。

俺もやってみた。ウィンドウをイメージすると俺の頭上にも出てきた。スロットスキル(?)は無かったものの、EXTRAスキルには、やはり剣術があった。後は複製というがあるだけ。……? ふくせい?

複製のところに意識を集中させていると、画面が切り替わり説明が表示された。

複製：一度見たスキルを複製して自分のスロットスキル化できる。

らしい、要約すると技を盗めるということらしい。なるほど、これは昔からの癖だった。というよりも、武術をやるにせよ、スポーツするにせよ、『技を盗む』という事は上達の近道でもある。小さい頃からそうやってしつけられてきた俺にとって、『技を盗む』というのは、身体に染み付いた癖のような物になっていたということなのだと思った。

イノシシって美味しいの……??

丸焦げになったイノシシ（超重い）を俺とたまもの2人で、さつき居た湖がある場所まで引つ張って行く。

そっいえば、スキルってどんなのがあるの？

なんとなくそう聞いてみた。

「そうですねー。ちょっと見てください」

と、またステータスウィンドウを出現させるたまも。EXTRASキル欄の中には、巫術（たぶんさつきの攻撃したやつだと思っ）と、家事があった。……家事ってなんぞ？

「家事って、そのまんま家事の事ですよ？ 山火事とかそっちじゃなくて、掃除洗濯炊事の家事ですけど」

「いや、分かるんだけど、俺も一応その位はできるけどスキル欄に無いのはどうしてかなって」

「ああ、別にスキルに無くてもある程度の事はできますよ。例えば他にも、走る、泳ぐ、などのスキルはありますけど、そんなスキルが無くても走ったり泳いだりする事はできるんですよ」

と区切って、こちらを向いて改めて話し出す。

「ただ、そういうったスキルがある事で、例えば走るなら、普通の人

達よりも速く長く走れたりというようになるのです」

なるほどね

「そして、『ランク』が高いほどスキルが上がります」

ランク??

「ランクと言うのは、スキルの横に書いてあるアルファベットの事ですよ。E、A、S、SS、EXの順に段々と上がって行くのですよ。因みに一般的なレベルだとCくらいですね。わたくしの家事スキルはBですけど!」

と、最後にはドヤ顔キメて力説してくれた。

なるほどと思っても一度自分のスキルを確認すると、さっきは見落としていたが、なるほどちゃんと書いてある。因みに俺は両方ともAだった。

「ご主人様凄いです! たまも感激しました! Aランクっていうのは、その道を極めた達人と言っても過言じゃないんですよ!」

らしい。まあ、昔から剣だけが取り柄だったからね。

そんな雑談をしていると、あつという間にもとの場所についていた。

では、わたくしが腕によりを掛けて作りますね? と、言って、家(?)らしき布を被せただけの簡素なテントのような居住スペースにいそいそと入っていった。ていうか、そんな場所あったんだと、今更になって気づいた。

なんか、モンスターの的なものもあるし、護身用に武器が欲しくなってきた。

やっぱり今まで剣術やってきたんだから剣とか木刀みたいなのがいいのかなあとか思いつつ、手頃な木の棒を探す。

木刀になりえそうな重みのあつて、ちょうどいい太さの木がなかなか見つからず、コレだというのが見つかるまでだいぶ時間がたってしまった。

戻ると、野生的なワイルドな香りが漂ってきた。

近くまで行くと。

あともう少し日を通せばできますから、待っていてくださいな。と、言われたので座って待っていることにする。隣には少し解体されたイノシシが横たわっている。若干シユールだ。

しばらくして。

「できましたよー。イノシシの鍋です　　とは言ってもそんなにたいした具は入ってないんですけどね」

と、舌を出しながら、テヘッと、照れたようにはにかむたまも。天然なんだろうなー

鍋にはイノシシ肉しか入っていないかと思つたら、他にもキノコやら野菜、それにミソのような物で味付けまでしてあつて、とても美味しかった。コレがスキルの力なのかと思うと、家事スキル欲しいなあとか思ってしまう。でも、野菜はともかく味噌なんてよくあつたな……

そんな呟きに

「それはですね、町の方からちょちょいと拝借しているのですよ。仕返しがてらにですね」

なんか、そういうのはちゃっかりしていて、とても遅しく思えてしまった。

そういえば、地図とかつてあるの？

夕食後に片付けをしながら聞いてみた。

「地図は無いですけど、西の方に出ると大きな街があるって聞きましたよ？」

じゃ、明日起きたらとりあえず西を目指して旅にでますか。

「はい！ ご主人様。明日が楽しみです」

明日の日程を確認しつつ今日は寝ることにした。

因みに、俺が寝たのはだいぶ先の話で、寝る前までずっとたまもに借りた包丁を使って、拾った木の枝を削って、木刀風に、仕上げている。

ああ、眠い……

旅の始まり

「138！ 139！ 140ッ！」

「ふうあ……。うん。おはようございますう。早いですね、ご主人様……」

俺が昨日の夜に木の棒を削って作った木刀を素振りしていると、まだ眠いのか、目をゴシゴシ擦りながら欠伸をかみ殺しながら起きてきた。

「149！ 150！ つと。おはよ。たまたま早く起きただけだよ。いつもはもっと遅く起きてるし」

昔は親父に毎日叩き起こされて、道場で稽古させられたっけ……

今では考えらんないけど

「そうなんですか、では、顔を洗ってくるので、その後に朝食の準備をしますね」

と言って、湖の方まで向かっていった。後50やったら俺も顔洗うかな？

その後、つつがなく朝食も終了して、旅支度。朝食は昨日のイノシシ鍋を温め直して食べた。たまはずっとここで暮らしていたらし

く、少し寂しそうにしていたが、決別できたのかこっちによつてきた。

「準備できましたよ、ご主人様　それでは出発しましょう！」

たまもは料理道具や調味料など、俺は昨日寝るのに使った布をカバンに突っ込んで持っている。荷物の確認を終えたのちに出発する。

「とりあえず西なんだけど、どっちだ？」

「西はですね、コッチですよご主人様？」

というと、たまもが急に俺の腕に自分の腕を絡ませながら引っ張っていった。ちょ、ナニコレ！？　ハズいんですけど！

顔を真っ赤にしてる俺にたまもは

「もうご主人様ったら、テレテレしてて可愛いです」

そんなことを笑って言うてくる。今確信した。今までのアレは全部確信犯でやっているのだと。

……まあでも役得なのかな？

でも、結局はそんなことを考えてしまうのが男の性さがだったりするのであった。

初めての戦闘

しばらく歩いてしていると、鬱蒼とした森を抜ける。時間になると約2時間くらい。

森を抜けた先の草原は、見晴らしも良く、透き通るような風が心地いい。天気は見事な晴れ間が覗き、久しぶりに日光を浴びる。その日の光の眩しさに、一瞬目が眩みそうになる。

今までは、森の中であまり日の光なんて当たらない場所だったので、目がなれるまで時間がかかる。

気分を一転しつつ、軽く伸びをしていると

「……………」

「どうかしたのか？」

たまもは、淋しげに森の方を見ていた。やっぱり、いままで住んでいた場所を離れるのは淋しいのだろうか？

「いえ、べつに。大した事じゃないんですよ？ ただ、少し……。やっぱりなんでもないです！ ほら早く、次の街にいきますよ！」

そっぴいなながら、俺の手を強引に引っ張っていく。って、ちょ、待ってって！ このままじゃコケるって！ いやまちで！

もう、しょうがないから少しだけ待ってあげますよ。と、イタズラっぽく笑ったまもに俺は嘆息で返すのだった。

草原を歩くこと1時間。しばらくすると、舗装された街道に出た。たぶんこの道を西に進めばいいのだろう。

それにしても、こんなに天気がいいのならお弁当でも作って来れば良かったですよー？

そうだな、穏やかな風に暖かい日差し。とてもピクニック日和だと思っ。

そんな会話をしていると

「ぴきっ」

……スライム(?)が現れた。

スライムっていうか、緑色のネバネバ又チョ又チョした粘性の物体が、街道を横切っていた。……アレナニ？

スライムなんじゃないですか？ ネバネバしてますし……。とりあえず倒しちゃいましょうか。

そんな風に作戦会議をしていると、スライムがモゾモゾとじだして、やがて人型になる。

「ていうか、あの形俺じゃね?! スライムが俺の形になってんだけど! うあ、なんかキモイ」

あらあら、ご主人様そっくりですね、ちょっとキモくてイラッときちやいますけど」

そんな俺たちを尻目に、スライム（俺モドキ）は、こっちに向かってくる。

ヒタ

ヒタ

ヒタ

ちよっ、まぢでキモインでやめてくれって！

スライムは両腕らしき所を、ゾンビのように上げて迫ってくる。自分そっくりの緑ゾンビとかイヤ過ぎるだろ！

気づいた時には木刀を手に、スライムを斜めしたから切り上げていた。

「ぴきいっ！」

だがしかし、スライムは鳴き声を上げながら二つに分裂しただけで、また俺たちに迫ってくる。あああっ！キモい、キモすぎる！

俺は迫り来るスライムを切り続け、分裂しようがお構いなしに八つ裂きにする。

「ハア、ハア、」

切り続けること10数分。やっとスライムを倒した。もう、増えん

だろ……

「お疲れ様です、お金がドロップしましたよ？ あら、結構なお金
がドロップしてますねー」

そんなにか？ と、たまもの方に駆け寄る。彼女の両手には、大量
の金貨が。コレっていくらくらい？

「そうですね、それなりの装備が一式揃って、少し余るくらいです
かね？ まあ、その街の物価にもよりますが、だいたいそんな感
じです。街についたら装備でも整えましょうね」

了解。で、なんであのスライムそんなに金持ってたんだ？

「たぶん、商人でも襲って光物の金貨を集めてたんでしょうね。モ
ンスターはそういうのが大好きですから。因みにわたくしも金貨と
かの光物は大好きですよ？」

お金に余裕ができたならな、と言っておく。何気にちゃっかりとアピ
ールしてきた。……恐ろしい子。

「もしかしたら、手配モンスターかもしれないので、ギルドにでも
よってみますか？」

何それ？

「ギルドというのはわかります？」

まあ、だいたいは。依頼をクリアすると報酬が貰えるシステムのあ
れだろ？

「だいたいそんな感じですよ。ギルドには依頼掲示板というのがありますよ、冒険者がその依頼を受けてクリアして、報告する事で報酬を上げるといふものです。中にはモンスターを倒してくれているのがありますが、そういったものは、事前に依頼を受けていなくても、証拠さえ見せれば報酬をくれるんですよ」

なるほど、じゃ、あんまし気は進まないけど、この緑色の物体も一緒に持ってくか。

それがいいでしょうね。と、話しながら次の街を再び目指すのだった。

ありがちなバツタリ

しばらくすると、道の先に大きな白い砦のような物が見えてきた。

「あれが街なのか？」

「そうだと思いますけど……。わたくしも人の話声を盗み聞きしていただけなので、あまり詳しくは分らないです」

盗み聞きね、商人が誰かかな？ そうすると、ここは市とかあるのかな？

「どうでしょうね……。まあ、行ってみればわかりますよ」

それもそうだな。

2人は会話をしながら街に向かう。この時もやっぱり腕と腕はピツタリしたまま。風が強くなってきて寒くなってきたから別にいいんだけど……。うん、イロイロ当たったり当たらなかったりしてるけど、他意はないよ？

そんなこんなで、砦の前に。砦には大きな門があり、その周りには大きな堀がある。なんか、一種の要塞になってるんじゃないかって位の用心ぶりである。

門まで行くには、跳ね橋を渡らなくてはならない。跳ね橋の前には守衛さんらしき人が居たので、話しかけようとする。

「おい、貴様ら。入国審査署を出せ。」

……めっちゃ高圧的な態度を取られた。流石に口がポカンだわ。

しかし、守衛さんらしき人（上から目線）は、無いんだったら、怪しい人物として捕まえるから。たか言い出して、首に下げてた笛を鳴らす。

ピピーッ！

という音と共に、どこから現れたのか大量の守衛さんらしき人（重装備）が俺たちを包囲する。何？ 問答無用？！

俺はたまもとアイコンタクトをする。やっちゃっていい？

やらないとマズイですよね、流石に。と、同意見らしく、俺は腰に刺した木刀に手をかけ、たまもは袖からお札を取り出す。

両者一步も引かないまま、時だけが過ぎて行く。お互いにスキなしの状態。

そして、向こうが痺れを切らして襲いかかりかけた時……

ギギギイ……………ボタン！

跳ね橋が降りて、人が現れた。

そいつは他にも3人位引き連れていて、俺たちの方を見て、何やってんの？ 的に首をかしげる。

守衛さんらしき人（最初に会ったやつ）が、いきなり現れたやつのとこまで行って耳打ちをする。耳打ちを終えるとそいつはこちらま

で歩いて来た。

見た目は長い黒髪をサイドで一纏めにしたような髪型で、前髪が邪魔なのかヘアピンで止めている。つり目気味な目と、スツと通った鼻筋が特徴的な美人で、服装は何故かチャイナ服。(周りの守衛さんらしき人達はみんな鎧に甲冑と西洋風)

つて、どっかで見覚えが……

「て、お前！ まさか?!」

「気付くのが遅いわ！ バカ健吾!!」

声と同時に重い衝撃を受けて、そこで俺の意識がぶつりと切れた。

幼馴染はバカ力

うあん？

身体を起こすと見たことない場所にいた。

なんで、俺寝てんだっけ？

……、ああ、そついや殴られて気絶したんだっけ？

そこで、改めて部屋を見渡す。そして軽く見渡しただけで分かるこの場違いさ。寝かされているベッドはふかふかで、白く清潔なシーツが敷いてあるし、掛け布団に至ってはデザインが赤と金の派手なもの。床に敷いてあるマットも部屋を飾る調度品からカーテン、照明器具その他 *etc etc* が、とても煌びやかである。照明に至ってはシャンデリアだし。そんな風に、部屋を見渡し、感嘆半分の呆れ半々な心境でいると、ドアが開き。

「あ！ ご主人様！ 起きていらっしやっただんですね！」

と、たまもがぱたぱたとこちらまでよって来た。そして、後に続いて来るのはチャイナドレスな少女。

「たく、貧弱ねえ。たかが女の子の一発で伸びるなんて情けないったらありゃしない」

うるせえ、バカ力。

彼女の名前は天音^{あまね} 鏝^{かぎ}。一言で言えば幼馴染。というのも、お互いの親が武術系の道場を持っており、そのおかげか、両方の家の親交が割と深かったのだ。因みに天音の家は隣町にある。そして、見た目の通り、天音の家では、八極拳を教えている。

「はあ？ あんたの鍛え方が甘いだけよ！」

めんどくさ……。チラッとたまもの方を見ると。

「フカアーッ」

耳としっぽを逆立たせ天音をずっと威嚇していた。

「ご主人様が弱いんじゃないかと、あなたが筋肉ダルマなだけだと思います！」

何故かたまもが俺の援護をしていた。まあ、いつものやり取りだから、そんなに気にすんなよ？ と、たまもをなだめる。

で、結局ここどこさ？

「ここは、城の中よ。ここは騎士の国、ブリタニアっていうらしいわ」

そう説明してくれた。ブリタニアで騎士とかどこのアーサー王だよ。

城ん中って……。

で、お前はこんなところで何やってんの？

「さっきたまもちゃんから聞いたけど、だいたいあんたと同じよ。大きな扉をくぐったらここにいた。ただ……」

ただ？

「あたしはね、『勇者』としてここに呼ばれたのよ!」

ぼくぼくちーん

ドヤ顔決める天音と、口が半開きの俺。構わず俺の介護をしてくれるたまもの図。

「……………、て、何か反応しなさいよ! 恥ずかしいじゃないの!」
顔を真っ赤にして憤慨する天音。知らんがな…………。

「そ、それにね。あたしは魔術師ウイザードのクラスなのよ!」

なんだよクラスって、つか魔術師とか脳筋のーきんには似合わん。

「脳筋ゆうな! クラスも知らないとーしろくにそんな事言われたくないっての!」

悪かったな!
で? クラスって何?

「クラスって言うのは、戦闘職のことで、騎士ナイト、魔術師ウイザード、弓兵アーチャー、槍兵サー、召喚師サモナーの五つがあるの。で、戦闘職に就きたい人は選定の泉に行ってクラスを受ける事ができるのよ。ホントだったら拳士になりたかったのに、クラスにないとかホント意味わかんないし」

おい、最後愚痴になっでんぞ?

「だいたい! クラス無しでモンスターと戦うとかバカなのよ!

ホントそのうち死ぬわよ?!」

最終的には八つ当たりになってるし。

「……ホントだったらあたしが倒すモンスターだったのに」

……、ああ、ただの負けず嫌いなだけね、単純。

めんどくさいんだって

アマネ様ー？

と、扉が開く。

入って来たのは、騎士風の金髪の少年だった。

「……………なに？」

沈んだ声の天音。

「うわあ？！……………な、何かありましたか？」

なんでもないわよ、で、何の用？（ドスの効いた声で）

「あ……………、はい、スライムが倒された事ですし、次はどうなされますか？ あ、狐耳のお嬢さん、こちらが手配モンスターだったスライムの討伐報酬です。どうぞお受け取りください」

「あ、ご丁寧にどうもありがとうございます」

たまもが巾着袋を受け取る。中はたぶんお金だろうな。ていうか、あのスライム手配モンスターだったのかよ……………

たまもと入れ違いに天音が口を開く。

「いいわ、今日はモンスター狩る気が失せたし……………。そうねえ、じや、こいつを選定の泉にでも連れて行きなさい。ていうか、こいつ

をウチのパーティに入れるから」

と、俺を指さす天音。おーい、選定の泉が云々は嬉しいが、勇者やる気なんてねーぞ？

「うっさいわね、どうせあんたも帰る方法探してんでしょ？ 冒険でもしてればそのうち帰れるわよ」

「ていうか、そもそも勇者ってなんだよ、魔王でもいるのか？」

「いるから呼ばれたんでしょ？ なんも無かったら呼ばれないでしょ？ ていうかそこら辺は後で王様に会う予定だからその時に聞いて」

はいはい、了解ですよ。それで、たまももいい？

うーん、ご主人様がいらっしやるなら何処でも行きますよ？

そっか、サンキュな、と、お礼をいう。

こら、そこイチャコラするな、2人とも早く行きなさい。

と、天音に急かされ、扉の所にいる騎士の所まで行く。よろしく。

しかし、

「アマネ様。この方もパーティに入れるんですか？」

ずっと立ち止まったままの騎士は天音に問う。

「連れてくわよ。言っとくけどそいつ、あんた達より強いわよ？」

「な、そんなわけないでしょう！ コレでも私は武闘大会で優勝しているんですよ?!」

天音に喰ってかかる騎士、何？ こいつより強ければいいの？

「あたし的にはどっちでもいいんだけどね。じゃ、あんた達手合わせでもしたら？」

「めんどい、やだ」「望むところです！」

2人の声が重なる。いつてる事はバラバラだけど。因みに前者が俺、後者が騎士君である。

「ちょ、話が進まないじゃない……」

「どっちでもいいんじゃないかっただけ？」

だいたい、そんなしちめんどくさいことなんかしたくないっつーの。

「ホンネ出てるわよ……。もう、四の五の言わずにやりなさい!」

めんどくさ……。はいはい、やればいいんでしょ？ また殴られて
気絶コースは勘弁な

という事で、中庭らしき場所に移動する俺たち。さっさと選定の泉とやらに行きたいんだけど。

「ガマンしなさいよ」

天音に叱られた。はあ、と嘆息していると、よしよしと、たまもが慰めてくれる。俺の心のオアシスはたまもだけだよ……

「じゃ、始めるわよ」

そこそこの広さのある中庭。もちろんきっちり手入れしてあった。すっげ。

「ルールは刃の無い模擬刀でやること。一本先取で終了ね」

では、と、騎士君は木でできた西洋風の模擬刀を選択した。俺はコレでいいか？ と、腰に刺した木刀モドキを手取る。

「いいわよ、じゃ、向き合って」

「ご主人様、ファイトです！」

たまもの声援を受けながら向き合う。因みに軽く木刀に手をかけたままに対峙する。若干騎士君の顔が引きつる。

「では、はじめー！」

天音の掛け声と共に、騎士君がコツチに向かって走り出す。あらまあ、威勢のいいことだ。

「先手必勝！ ハアアアア！」

剣を上段に構えて振り下ろす。なるほど速い。それを俺は木刀を寝かして両手で受け止める。両者の力が均衡して、剣と木刀が鏝^{つば}迫り合う。

徐々に騎士君が力を込めて、押し倒そうとするが、俺はフツと力を抜き、身体を横にむけて受け流す。すると、力の均衡が解けてそのまま騎士君が前のめりになって倒れる所を更に足をかけて倒す。そのまま後頭部に木刀を軽く当てて一本。はい終わり。

「どう？ コレで満足？」

「まだまだあ！」

しかし、騎士はすぐさま受け身を取り、体制を立て直して襲いかかってくる。が、

カキンッ

俺が木刀で手元を払う。すると、剣が手から離れて地面に落ちる。

「はい、終了。これで文句ないでしょ？」

天音の一言で終了した。

台風みたいな人

「これで分かったでしょ？ あんたよりコイツのが強いってこと」

天音が騎士君に言い寄る。どうでもいいんだけど、早く選定の泉とやらにいかないか？

「はいはい、ちょっと待っててよね」

そして、天音はもう一度騎士君に向き直り、武闘大会で優勝したからって調子乗ってないでもっと練習しなさい！ と、厳しいお言葉を残して行った。

プンスカしながら来る天音に、

「別にあそこまで言わなくても良いんじゃないかね？」

すると、

「良くないわよ！ ここには蘇生魔術なんて無いの！ だから死んだらそこで終わりなの！ そこはあたし達の世界と一緒なの。分かった？」

なるほどね、騎士君の事を心配してたのね。

「それもあるけど、あんなにアツサリと負けるとは思ってなかったのよ。あのレベルじゃパーティ組むのは考え直さないとね」

と、考え込んでしまった。いろいろあるのね。

そして俺達三人、たまも、天音、俺は、選定の泉とやらに向かう。向かう途中に質問。

「さっき、クラス無しでモンスターと戦うのが無謀って言ってたけど、どういう事？」

俺の疑問に対して、天音が答える。

「ああ、その事ね。クラスに就くと、ATK、DEFとかにボーナスがま付くのよ」

なるほどね、基礎能力が上がるっていう事は有利に戦闘が進むからな。

「それに、クラスにはレベルがあって、レベルが上がるとスロットスキルを入手できるのよ。いわゆる技を覚えるってこと。因みに覚えるスキルは人それぞれらしいわね」

ふーん、まるつきしRPGだな。

「そ、だから能力の振り分けとかはゲーム感覚でやればいいのよらしい。了解。

そんな雑談をしていると、小さな泉のある、緑の生い茂る空間に出た。やけに神秘的な場所である。

「で、どうすればいいんだ？」

「簡単よ。その泉の水を飲むだけ。そうすれば勝手にクラスがつくわ」

すると、

「わたくしが先にやらせて貰ってもよろしいですか？」

と、たまもが上目遣いに聞いて来る。いいぞ、先にやりたいなら先にやって来いよ。

そういうと、しっぽをふりふりしながら、やたーと喜んでいる。

早速たまもは泉のところまでパタパタと寄りながら、膝をつき、手を器の形にして水を掬い、んくっ、と音をたてながら飲む。

すると、たまもの身体が淡く光、しばらくして元に戻る。

「どう？ ステータス見せてみて？」

たまもに聞くと、ちよつと待っていてくださいね。と言いながらステータスを開く。

すると、名前の横に魔術師ウィザードと書いてある。成功したみたいだ。

「ではでは次はご主人様の番ですよ」

と、たまもが背中を押してくれる、分かってるって。

そして俺は膝をつき、水を掬う。目を閉じながらゆっくりと飲む。すると、身体が若干熱くなり、高揚してくるが、それも程なくしておさまる。

軽く念じてステータスウィンドウを表示する。

そこには、冴木健吾（侍）と書いてある。ナニコレ？

そんな疑問を持っていると、泉が光だして、中から神々しいオーラを全開でだしながら人が現れる。

そしてその人物を知っているのか、あぁっ！ とか言いながら指差す天音。

「あら、お久しぶりですね。お嬢さん」

柔らかい微笑みと同時に天音に目を向ける女性。どちら様？

「わたくしの事は、泉の精霊とでも読んでください」

了解。

で、クラスは五個しかないんじゃないかなかったっけか？

そうよそうよと、天音がゴネる。

「基本的にはと言いましたよ？ それに、その殿方は刀しか持てない不器用な方にお見えしましたので、それが丁度いいかと思いましたがですよ。いわゆる特別クラスです」

若干バカにされてるよな……

「ちよつと、あたしだつて生まれてこのかた八極拳しかやつた事ないわよ！」

天音さんや、どこまで八極拳が好きなんだね。軽くボヤくと、天音がキツと、睨んできた。おお怖つ

「貴方は器用ですから大丈夫ですよ。それに八極拳を使うなどは言つてませんし。八極拳を使いながら魔術の勉強もしてみても如何ですか？」

「使いながらつて、そんな器用なことができるか！」

「ふふつ。貴方ならできますよ。それでは期待してます」

そう言いながらまた泉の中に戻つて行つてしまった。今の何？

「あたしの時もあんな感じだったわ。いきなり出てきて、言いたいことだけ一方的に喋つて、さつさと帰る。ホント自分勝手にマイペースな人よ」

また天音がプンスカしてしまった。

そんなに怒るとシワが増えるぞ？ と、内心で思ったが、もちろん口には出さなかった。

ジャイアニズム天音

「で、次は何をなさりますか？」

たまもが、いつまでもプリプリしてる天音に問いかける。

「え？ ああ、そうね。じゃ、次は王様のいる王の間に行きましょう」

突然の問いにふいを突かれたのか、慌てたようにそそくさと歩き出す天音。

「ちよ、待ってって」

急に歩き出した天音を追いかけるように、俺とたまもは慌てて歩き出した。

歩いてる途中にふと思いついたことを聞いてみる。

「そっぴゃ、天音が勇者って聞いたけど、結局それってどういうこと？」

え？ 今更！？ みたいな顔で聞き返される。今更で悪かったな。

天音は、仕方ないわねと話し出す。

「最近、街や村にモンスターが出没するようになったんで。で、そのモンスターたちからの被害が徐々に増えだして、有志を募って自警団みたいな組織を作ったらしいんだけど、それがまったくダメだったの。モンスター一体倒すのがやっとのレベル。で、代々王家に伝わる秘宝、どうしようもなくなつた時に使えって言われてたらしいんだけど。まあ、それを使ってあたしがここに呼び出されたってわけ」

で、これがその秘宝。とサイドバックから、銀でできた扉アクセサリのような物を取り出す。

「それ秘宝なんじゃないのかよ!？」

「ん？ そうよ?」

なんか文句ある？ と、シレッと返してきた。

「迷惑代として、ここにある財宝は根こそぎぶんどってきたわ！ これもその一つ」

うわ、すっげージャイアニズム。

「それって、お宝だったんですね。わたくしももってますよ？ ほら」

と、たまもが袖からとりだす。あ、ホントだ。

「ご主人様も、これで御呼びしたんですよ?」

そうだったのか……。聞くタイミングが無かったから聞けなかった

けど、俺がどうやって呼ばれたのかがやつと分かった。たまもは、これがわたくしとご主人様の縁なんですね　と、大事そうに袖に仕舞いなおした。

そんなことを話していると、扉の前までできていた。ギギツと天音が扉を押し開ける。

「なんだね、アマネ君か。もうここには財宝は無いんだ！ さつさとモンスターを生み出しているはずの魔王を討伐してこないかね！」
えらく恰幅のいい、赤マントに王冠というとても分かりやすい格好の王様が言う。

「ん？　なんだ？　その後ろの妙ちきりんな格好の二人は」

妙ちきりんて、まあ、俺は長袖のシャツにジーンズで、こっちの世界からしてみればおかしいし、たまもは着物で同じく浮いてる。なるほど。言われてみれば確かに変な格好だ。

「今朝、門で拾ってきたやつらよ」

「ああ、門の前に居た不審者か。なぜこのような場所にいる」

「あたしが連れてきたのよ。アンタが寄越したパーティよりよっぽど役にたつと思ってね。そのことで相談があつてきたんだけど？」

王様に向かってアンタ呼ばわりってどんだけだよ。

「使えないって、そんなわけないだろ」

「でも、さっきアンタのお気に入りの騎士様は、この子と戦って中庭で伸びてるわよ?」

ねえ? とこっちを振り返る天音。まあ、そうだけど。

「あー、もう、知らん! 勝手にしろ!」

「じゃ、勝手にするわ。いくわよ」

と、踵かかとを返して扉を出る。と、また置いてかれる。俺はたまもの手をとり、一礼したから天音を追いかけた。

その後、

「そっぴゃ、なんで俺たち不審者扱いな?」

「アレ? 最近のモンスター被害に乗じて強盗まがいの犯罪も起きてるのよ。だから怪しいやつは全員捕まえてるらしいわよ?」

だどど。

とある朝の茶番劇

で、翌日。

昨日は王の間襲撃後もいろいろあって大変だった。天音の元パーティに追いかけて回されて勝負しろとか、部屋は天音が空き部屋見つけて（強奪）くれたので良かったが、王様にはネチネチ言われ続けたり、唯一平和だったのが、夕食の時くらいで、天音が貰って来てくれたらしい。というか、天音に世話になりっぱなしである。

因みに寝る時は、天音の部屋にたまもが泊まっていた。とだが……

「ん、うう……」

朝、ベッドから俺が起きるとそこには気持ち良さげに寝ているたまもの姿が……

濡れて伏せた睫毛^{まつげ}。薄いピンクの唇からは、スースーという掠れるような寝息が。頭の上についてる狐耳もペタンとなっていて可愛らしい。何この子の可愛さわ！

とかバカな事を考えながら、心臓の動悸を誤魔化す。こうでもしなきゃこんな場面对処のしようが無いんだって！

さて、どうする！ 俺！？

とりあえずこの後の選択肢としては、

- 1：起きた瞬間謝り倒す。
- 2：自分がやったんじゃない、これは事故だと押し通す。
- 3：誰にも見つからないように部屋から出て逃げる。

……まず、2はありえん。1はいきなりなんだよこいつ状態だし、ここは3が無難なラインだろうか。

言うが早く、俺はたまもが起きないように、そつとべつどから出ようとするが。

ガシツと腕を掴まれ、引き戻される。その後腕を身体に回されガツチリロック。WHY?! なぜ?

完全に焦りまくってまともな思考回路が保てない俺に構わず、気持ち良さそうに眠り込むたまも。ヤバイ、このままじゃ痴漢のレツテル貼られて何かいろいろ無くすぞ、俺!

そして、キィーと、扉が開く音がして、天音の顔が見えた瞬間、俺は人生が終わる瞬間を感じ取った。

「たまもー? って、やっぱりここにいたし、たまも! 起きてるんでしょ!? あんたが夜這い掛けてどうすんのよ!?!」

あちゃー、と思った瞬間、よくわからない言葉が。夜這い? 仕掛ける?

そこで、俺と天音の目が合い。

「信用は一応しといてあげるけど、何もしてないよね?」

ハイ！ 何もしてないです！ ていうか目が笑ってない、めっちゃ怖い！

「と、ほら起きなさいたまも！ いい加減にして！」

と、掛け布団を引っぺがし、俺とたまもを引き離す。たまもは天音の言っていたとおりに起きていたらしく、バレちゃいましたか。と、舌をちろつとだしていた。

天音は勝手に部屋に出ちゃダメでしょ！ と叱りつけ、たまもの手を引いて部屋に戻って行った。

その時たまもは、ニコニコしながら手を降っていた。そして、1人ぽつねんと寂しく部屋に残される俺。

何だったの、コレ？

刀を手に入れた！

その後、自室でつつがなく食事を済ませて、天音の部屋に行く。

「ノックはした方がいいよな？」

親しき仲にも礼儀あれ。俺がドアの前に立ってノックしようとする
と。

ボタン！ と、勢いよくドアが開く。つつー！ アホか！ めっち
や頭痛いんだけど!?

「あ、何？ 居たの？」

悪びれもせずしねっと言う天音。お前なあ………！

「あ、そうそう。今日買い物するから準備しといてよ？ 1時間く
らいしたら城の前に集合ね」

それだけ言うとさっさと部屋に戻って行ってしまった。はいはい了
解ですよ………

というわけで1時間後。俺は門の前に突っ立っている訳だが、

「………遅い」

とは言っても、待ち合わせピッタリの時間だけど。待ってる時間と

いづのは長く感じるんだから仕方がない。

因みに時間はこっちでも24時間で一日。時計もあって、動力は魔力らしい。

「ごめーん。待った？」「お待たせしました。ご主人様」

「いや、俺もさっき来たばっか」

2人とも昨日と変わらないピンクの着物にチャイナドレス。一種のコスプレパーティみたいだな。

「で、今日は何を買いうんですか？ 天音さん」

たまもが天音と話している。今まではたまもが人見知りしていたから昨日は俺としか喋っていなかったが、昨日の夜に打ち解けたみたいだった。

「んー？ そうねえ、とりあえずお金はあるから一通りの装備と食料、地図かな？ 後はギルドに顔出してクエスト確認しとかないと。」

「了解。そーいや騎士君とかは結局？」

「解雇に決まってんじゃない、あんなへなちよこ要らないわ」

「ご主人様がコテンパンにしちゃいましたからねー」

そんなバカ話しをしながら市場をうろつく。街の様子は完全に西洋調で、石造りの建物が目立つ。そして、見回りの警備の人も甲冑装

備。売っている武器も両刃の剣が多い。なるほど、騎士の街とはよく言ったもんだ。

「でも俺、甲冑なんか着たくないぞ？」

動くのにとっても邪魔だ。

「それでしたらわたくしが繕いましょうか？ わたくしならすぐにも作れますよ？」

「え、何？ たまもって裁縫もできるの?!」

天音が驚いたように聞く。

「すげーな、お前。じゃ、俺の服はたまもに頼もつかない？」

「任せて下さい！ ご主人様？」

えへへ、と笑うたまも。俺は道場着みたいな感じで頼むと、たまもに注文しといた。

「んー、じゃ、あたし達の装備は間に合ってるから、後は武器かな？ あんたやつぱり刀のがいいでしょ？」

「そうだな、モンスターと戦うなら刃が付いてた方がいいもんな」

「じゃ、南の門の方に行く？ あっちの方は商人が多いからこの街以外の武器があると思うし」

「いや、俺は一人でいくわ。お前等はここで買い物してたら？」

「そ、じゃあたし達はここにいるわ」

そして俺は南の市を目指した。

南の市には着物姿の商人などがいたり、ローブ姿の商人や、頭にタバンを巻いた人も居たりと、いろんな人がいた。

俺は日本風の人がいる出店の前で武器を眺める。そこには多種多様の刀が揃っていた。

いらっしやいませ。と、店の人が頭を下げ、何かお探ですか？と尋ねてくる。

「うーん、刀ってここにあるので全部？」

「はあ、売れるものはここにあるので全部ですけど」

「売れるものは、っていうと、奥には売れないものが？」

「売れないというか、主人が趣味で作ったものなんです。とても常人では扱えるものではなくて」

「それ見して下さい。」

ぶっちゃけここにあるのは普通過ぎる刀ばかり。これといって良いものが無い。

では、少々お待ち下さいと奥から一本の刀を取り出す。ながさは4尺2寸9分m30cmのかなり長いもの。まるで佐々木小次郎が使っていた物¹

干し竿レベルである。なるほど確かに扱はずらそうだが、刃などを見るとシツカリ鍛えられていて切れ味も良さそうだ。

「じゃ、コレ買うよ。刀の銘は？」

「夢霧むぎりと言つそうです。」

俺はお金を渡し刀を手取る。
ん、良い買い物したし、戻るか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4693y/>

scwarz/GATE

2011年11月20日19時47分発行